

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第713号 平成26年4月1日

## 片付ける

先日、長崎市の馬場教育長が、小学校6年生の女児のいじめ自殺に関して、この問題が早く「片付くといい」と発言し、その後「遺族の心情を傷付けたのなら申し訳ない」と反省している様ですが、この件は全国紙でも取り上げられ、大きな反響を呼びました。

当の教育長は、「丁寧に対応しなければならないとの意図」だったと釈明していますが、少なくとも、教育長の発言としては軽率な一言だったといわざるを得ません。

まず、小学校6年生の女児の自殺について簡単に触れておきたいと思います。

このいじめ自殺は、昨年7月に小学校6年の女児が自宅で首をつり、その後、死亡したもので、市の教育委員会は児童約50人から聞き取り調査を行い、9月に、

- ・修学旅行の班決めで仲間外れにされそうになった
- ・上履きを隠された

という2件のいじめがあったと発表しています。

市教育委員会のこの発表に対して遺族は納得せず、独自に女児へのいじめについて問うアンケートを作り、学校に実施を依頼しています。これを受けて学校が昨年10月下旬に4～6年の約400人の児童を対象に調査を実施した結果、

- ・女児が虫を食べさせられた
- ・「何でも言うことを聞きます」という誓約書を書かされた

といった悪質ないじめの存在が浮き彫りになっており、遺族は、市の教育委員会に対して、いじめ自殺に至った真相の究明を強く求めています。

この問題で市教委は、昨年10月、調査結果を検証する外部の有識者による調査委員会を設置しています。また学校では、先のアンケート調査の結果を受け、再度、児童への聞き取り調査を検討しているとの事です。

以上が、女児のいじめ自殺問題の簡単な経過ですが、一方の馬場教育長の発言の経緯についてもみておきたいと思います。

女児が自殺した学校では、3月19日に卒業式が行われたのですが、田上市長の代理で出席していた馬場教育長が、来賓控室で他の来賓から「(問題が)早く落ちつけばいいですね」といわれ、これに対して馬場教育長が「片付けていけないといけませんね」と応じたというものです。

私は、馬場教育長を弁護するつもりはありませんが、多分「片付ける」という言葉は「問題を解決する」という趣旨だったのだらうと思いますし、少なくとも、いじめ自殺問題の真相究明に及び腰で、早急に火消ができれば良いと考えている筈はなかろうと思っています。そんな事は遺族だってわかっていると思います。それでも遺族が「失望を禁じ得ない」と市教委に文書で抗議したというのは、「片付ける」という言葉の持つ冷たさだらうと思います。

広辞苑を開くと、「片付ける」というのは、

- ・散乱したものを整える。整理する。
- ・物事を解決する。処理する。整理する。

等とあります。

つまり、いじめ自殺という深刻な問題に対して、「片付ける」という言葉は余りにも事務的で、亡くなった児童に対する哀惜の念といったものは感じられないし、まして、いじめは絶対に許さないという強い意志も伝わっては来ません。

「たった一言」というなかれ、その一言に本音が潜んでいる事を、人は見逃してはくれません。

最近では、政治家の失言や妄言が後を絶たず、どれだけ国益を損じているか分かりませんが、いやしくも教育に関わる者は、言葉の持つ力や影響力にもっともっと敏感でなければならないと思っています。(塾頭：吉田 洋一)